

【ポスター発表】

**主題：外国人介護技能実習生の就労適応を促すための技能実習前教育
—指導に携わる介護スタッフのインタビューから—**

○ 名古屋商科大学 椿田 貴史 (009956)

名古屋女子大学 嶋崎 和代 (010101)

キーワード：介護技能実習、就労適応、技能実習前教育

1. 研究目的

外国人技能実習生の受け入れ施設にて、指導に携わる介護スタッフを対象にインタビュー調査を実施し、技能実習生の事前教育において求められる要素を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

「技能実習法」（厚労省、平成29年）の施行にあわせて外国人技能実習制度の対象職種に介護職種が追加された。2022年6月時点では約15,000人の介護技能実習生が介護現場で活躍していることが報告されている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング、2023）。2023年現在は技能実習制度の見直しが進められており、今後は人材確保だけでなく就労適応および定着とキャリア支援がますます重視されるようになると言える。より効果的な人材育成のためには、介護現場で求められる知識・技術・態度などを整理し、監理団体で行われる技能実習前教育に盛り込むことが必要であると考えます。

本調査では、A県内の技能実習監理団体の協力を得て、インドネシア人技能実習生を受け入れている介護老人保健施設にて技能実習生の指導を行っている日本人介護職員を対象にインタビューを実施した。オンラインにて3~4名のグループを対象としたフォーカスグループインタビュー（以下、FGIとする）とし、「外国人技能実習生に期待すること」「日本の介護で伝えたいこと」「現場での就労にあたって予め知っておいてほしいこと」の3つの質問項目を設定した。インタビュアー（研究者）は、これらの質問について文脈に応じて適宜言い換えや要約・フィードバックを行い、質問項目以外の自由意見も引き出しながらFGIを進めた。本調査はJSPS科研費（JP20K02280）助成研究の一部である。

3. 倫理的配慮

参加者が所属する施設管理者に研究の趣旨を文書および口頭で説明し、研究協力の承諾を得た。参加者には施設管理者を通じて事前に研究の目的、内容、倫理的配慮を記した研究依頼書と同意書を配布してもらい、FGI開始前にも再度説明を行った。インタビューデータはICレコーダーを用いて録音し、逐語録とすることを伝え同意を得た。本研究は名古屋商科大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号第20003号）。なお、本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

1) 参加者の属性：FGIに参加できたのは2施設の2名と4名、計6名であった。性別は女性3名、男性が3名であった。年齢は20代が1名、30代が2名、40代が3名であった。

介護職経験年数は13.2±5.0年であった。新人介護職員や介護実習指導の経験を持つ者は5名であり、そのうちの1名は管理職であった。

2) FGIにより得られたデータの要約

(1) 外国人技能実習生に期待すること

参加者全員からあげられたのは「思いやり／気遣い」であった。この他に「介護に必要な知識・技術の習得」「技能実習生が将来的に介護職を育てること」などがあげられた。また、技能実習生への期待だけでなく「技能実習生の指導を通して日本人介護職者が成長することも期待している」という意見があった。

(2) 日本の介護で伝えたいこと

態度や姿勢の面では、「謙虚さ」「対象の尊厳を守る対応」「日本人ならではの丁寧さ、優しさ、きめ細やかさ」「対象に合わせたコミュニケーション」などがあげられた。知識・技術面では、「安全なケア技術」「衛生管理（手洗い・消毒・掃除など）」「日本人の死生観や看取りのあり方」などもあげられた。

(3) 現場での就労にあたって予め知っておいてほしいこと

参加者の半数が、技能実習生の日本語能力には問題なく、監理団体での技能実習前教育で学んできた知識・技術で十分であると回答した。残りの半数からは介護に必要な知識として「ボディメカニクス」「高齢者に多い病気（脳梗塞、誤嚥性肺炎、尿路感染など）」「専門用語（褥瘡、嚥下、咀嚼、誤嚥など）」「略語（食介、体交など）」「日常会話での口語表現や方言」「レクリエーションに役立つ日本の歌や昔の遊び」「日本の職場での習慣や暗黙のルール（5分前集合、仕事開始前の情報収集など）」があげられた。

(4) 自由回答：技能実習生受け入れ後の職場の変化

3名の参加者からあがった「職場が明るくなった」「利用者の受け入れが非常によい」という意見に全員が同意し、職場にポジティブな変化が表れたことが示された。

5. 考察 ※ 参考文献は学会発表資料に掲示予定

質問項目(1)(2)の回答から、介護現場では“思いやり”“気遣い”“優しさ”“対象への尊厳”などの態度・姿勢が最重要視されていることが明らかになった。これらは日本人・外国人を問わずケア従事者に携わる者すべてに求められる要素（Papadopoulos, 2016）と言える。一方でこのような態度・姿勢は技能実習生の母国での生活習慣や文化的・言語的背景により、表現の仕方が異なる可能性がある（塚田編, 2010；野田他, 2018）。したがって、介護現場で求められる“思いやり”“気遣い”が相手に伝わるように表現する方法（言葉・表情・しぐさ）を、技能実習前教育に組み込む、技能実習に携わる指導者がモデリングするなど、技能実習生が理解しやすい形で具体的に示すことによって、行動化につながることを期待できる。また、時間的感覚や責任感の違いなどがトラブルにつながるといった問題点がこれまでも指摘されている（塚田編, 2010）。(3)に対する回答から、日本の高齢者の文化・生活背景や、勤務時間外にも仕事に必要な準備をするといった日本ならではの習慣についても事前に情報提供することで、円滑な就労適応の一助となると考える。